

第六講 歴史主義の問題と社会史の台頭

レポート講評

自分が所属する世代の歴史が書けていない。事実の羅列に過ぎなかったり、過去の回想であったり、ドラマやタレントの解説で終わったり、自分の周りで起きた生活の変化を論じたり、あるいは現象の説明だったり、道徳的決意で締めくくったりして終わっている。

歴史は道徳ではないので、「かくあらねばならない」という見方は歴史には無縁である。ラインについて触れるならそれが IT 化とそれによる生活や世界の在り様の変化を人類史の中でどう位置付け、意味づけていくのかという視点が必要。

歴史主義の特徴

経験的解釈に基づく歴史記述（経験主義的解釈学）。

「本来いかにあったか **Wie es eigentlich gewesen.**」

合理主義：神話や超自然的存在の関与を排除

合理的に計算された人間の行為

事実を国民史の枠組みの中に埋め込む。

ベルリン大学でゼミナール形式による授業。

→歴史を外交史に特定（歴史主義の起源）。

→公文書の主観性・プロパガンダ性・民衆を無視。

→国家のイデオロギーを代弁。

大学という教育・研究機関の存在。

歴史学者の卵はどこで教育され、研究し、評価されていくのか。

大学という場の存在。

教育を通じて方法論・社会的帰属意識・階級的価値観・国家観の共有

→ギルドの形成。

歴史家集団の閉鎖性

宗教的：プロテスタント。

民族的：ユダヤ人の排除。

政治的：自由主義。

社会的：中産市民層。

国民国家を基礎とする外交史・経験主義的解釈学・外交官僚に対する信頼
様々な利害集団から構成される国内を無視
君主や貴族層からも民衆からも自立し、価値中立的という外交官への
信頼

社会的環境の変化

ドイツ統一の達成（1871年）

東ドイツのユンカーの権威主義的支配に対する嫌悪感
労働者階級の台頭と社会主義政党の拡大に対する警戒心

1863年 全ドイツ労働者協会（ラッサール）

1869年 社会民主労働者等結成（ベーベルとリープクネヒト）

1875年 社会主義労働者党組織（ゴータ合同）

1878年 皇帝狙撃事件

1890年 ドイツ社会民主党（エルフルト綱領採用）

労働組合の結成相次ぐ

政府の自由主義的な政策に期待

限界と反動化

経済史の系譜

国民学派（歴史学派）経済学

F. リスト

ロッシャー、クニース（旧学派）

シュモラー、ブレンターノ、ビュヒャー（新学派）

ゾンバルト、ヴェーバー（最新学派）

保護関税政策

所得の再分配・社会政策→社会主義に対抗

経済の歴史的発展段階

文献・統計資料による実証的研究

理念系の構築

社会経済史

文化史論争（ランプレヒト：他者の排除）

K. ランプレヒト（1856 - 1915）

マールブルク大学教授

ライプチヒ大学教授（1891年～）

『中世ドイツの経済生活』4巻(1886)

『ドイツ史』12巻(1891 - 1909)

1909年「文化史・普遍史研究所」設立,

法則的・段階的文化発展論

諸民族の文化を比較

普遍史を追及

ランケ流政治史を非科学的と批判

文化史論争

教授資格 Habilitation(ギルドからの逸脱を規制)

外交史

ワイマールの歴史家たち

オットー・ヒンツェ（1861～1940）

比較国制史

『封建制の本質と拡大』1929

『西欧における身分議会制の類型学』1930

アルトゥール・ローゼンベルク（1889-1943）

中産階級のユダヤ人

マルクス主義者

古代史研究者

野村修・訳『ボルシェヴィズムの歴史』（1968年、晶文社）1932

足利末男・訳『ヴァイマル共和国成立史 — 1871-1918』（1969年、みすず書房）1928/33

イギリスに亡命

ブルックリン大学